



患者さんも参加 医療安全活動

一人の気付きをチームの行動にー

医療事故を防止することは、患者と医療従事者にとって非常に重要な問題です。かつては医療従事者個人に責任が追及されることもありましたが、現在は診療システムの問題と考えられています。さまざまな場面でマニュアル（診療手順書）が作成され、問題が起これば、改訂作業が繰り返されてきました。しかし、マニュアルを実行する人が人間である以上、医療事故が無くなることはありません。

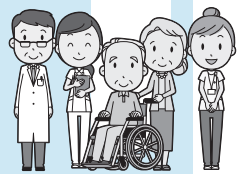
医療事故の原因を分析すると、技術の問題よりも医療チーム内でのコミュニケーションの問題があることがわかっていきます。事故の前には何らかの異変があり、誰かが気付いているもののなです。「まあ大丈夫だろう」「自分が言っても仕方がない」などと、個人の気付きがチーム内で共有されないことが事故を招きます。

チーム医療のマニュアル「チームステップス」は、米国で開発され、日本で東京慈恵会医科大学付属病院が普及を進めています。普及は、腹腔鏡手術事故が多発した青戸病院事件の反

省から、病院全体での取り組みが進んだためです。職種間・職種内で上下関係があり、ベテラン・新人の混在する医療チーム内では、コミュニケーションが上手にいかないことを前提としています。それ故にわかりやすい伝え方や他者の考え方も尊重する受け止め方をあえてマニュアル化しているのです。

「チームステップス」には、2回チャレンジルールというのがあります。一度気付きを伝えてお座なりにされても、本当におかしいと思ったら2度伝えるまでは発信者の責任です。受け手側は、2回発信されたら一度立ち止まることをルールとしています。

医療チームは、医療職・介護職・事務職も含めた多職種で構成されていますが、その中心は患者さん（家族も含む）です。医療事故を防ぐためには、患者さんの協力も不可欠です。「何かおかしい」と気付いたら、我々に遠慮なく伝えてください。我々もそれに真摯に向き合うことで、よいチームをつくりたいと考えています。



笠間の歴史探訪 35

大橋天狗党森義健・貞次郎の碑

笠間市八田地区に建つ大橋公民館前の道路を横断して丘に登ると、森家累代の墓所があります。同墓所には、「森義健君寿蔵碑」と「貞次郎森君碑」が並び建っています。両碑とも、笠間の書家亀井有斐（直）の揮毫です。

江戸時代、大橋村は水戸藩領でした。森家は水戸藩の庄屋兼山横目を長年務めました。水戸藩の幕末維新の混乱期に庄屋であった重左衛門（義健）は、尊王攘夷運動を志し、長男貞次郎と共に安政五年（一八五八）総勢十三名で大橋天狗党を結成しました。重左衛門四十三歳、貞次郎二十二歳でした。

その実質的リーダーである貞次郎は、文武の道に励む向上心の強い若者であり、成沢村（水戸市）の加倉井砂山の日新塾で学びました。ここで斉藤監物・鯉淵要人らと親交を深めて尊王攘夷思想に接し、熱烈な尊攘派となりました。父子共々尊攘派の森家は、大橋村その周辺の村々の尊攘派の交遊の場となっていました。貞次郎は、安政・元治年間（一八五四～一八六四）江戸へ出て国事に奔走し、また藤田小四郎らの筑波山挙兵に馳せ参じました。元治元年（一八六四）八月、天狗党別働隊の田中恩蔵一派が大橋村付近を横行して放火略奪を行ったため、憤激した村役人層は諸生派に与し、森家・筑波挙兵参加者宅を襲撃して二度にわたって打ち壊しを行いました。当時、重左衛門は京都に潜伏していました。

十月、貞次郎らは、大子村に集結した天狗党に合流しました。その折、彼は幼

い娘・いその頭をかき撫で名残を惜しみ出発したと伝えられています。これが親子の今生の別れとなりました。

十一月一日、武田耕雲斎を総大将とする天狗党は禁裏御守衛総督一橋慶喜を頼って京都へ赴き、朝廷へ尊王攘夷の志を訴えるため大子村を出立しました。時には戦い、時には戦わずして多くの藩領を通過して約千キロを歩き通しました。厳寒に耐えて幾多の山野を踏破し、艱難辛苦の行軍を続け四十日後、敦賀近郊の新保宿に到着しました。しかし、彼らを待ちかまえていた幕府・諸藩の追討軍総督が、頼りとする慶喜と知って絶望し、天狗党はついに投降しました。

幕府の裁決の結果、総勢八百二十三名中武田耕雲斎以下三百五十二名が死罪となり、大橋天狗党から参加した貞次郎（二十九歳以下四名も斬刑に処せられました）。

明治元年（一八六八）、明治新政府が成立すると、天狗党が正義で官軍、諸生派が賊軍とされました。重左衛門も五年にわたる潜伏生活から帰村して庄屋職に復帰し、諸生派に与した農民に謝罪状を書かせて許しました。

（市史研究員 萩野谷洋子）



森家墓地内の碑（大橋）
（左）森義健君寿蔵碑
（中）貞次郎森君碑